御裳濯川
元服曽我
絃上
花月
現在鵺

夫

御裳濯川

第

山も内外の神路でく二見の

浦を尋ん　抑是ハ當今に仕へ奉る

臣下也　偖も伊勢太神宮に参り

うちとの二宮に次より識に内外清

浄の信心私なくはよき次て参て

へい日をより石の鏡に参り二見の

浦とも一見をさやとなれは五十鈴
川清き流れのはてしなく陰
も百枝の雲風おさまる末の色とは
も神の恵の花影そ可うつるなる
心ちさくあらはれぬ氣色なく
詞 急き程よ是は二見の浦に急
てか人をお待ちある神秘の様子

みちるなり 露ならぬ水うけ落ちる
種とりて手玉もゆらく彼うれ
折る河田子の枝そよや御裳濯川
の水なるらん 有うるや神の世川き
いつまての世まての世経えて
今人の世に至るも川の時日も
まして千世萬代の末掛て出る

民あれは恵の玉は幾久しけに実る家
名も曇らぬ神路山うちとの宮も
き清きは裳濯川の水も清うけて
かゝる田面の早苗とる田子の裳の色
まこともげにとし豊かに楽しむ利
種とは海さきこそとおさめし神代より
嘗もすれ我大君の玉まきいはく

いつも同じ神と君隔てなき世なす
まもりの誰か恵の外ならん宮や八
嶋の海まても波静かなる風の枝と
まさに清ねあめつちの神慮威徳も
有りかたやいふに翁是成小田をも
まは田水は苗成みち行あそ住き文
ごてくうそとふく禮をまねす撰

ありとやらん入ありてとも是ハ何とやうなる
謂なりそ是ハ裳濯川と申て
神水にては種よ田ゐハ世にちかきに
然ば河水を種に入神徳長久の恵を
うけんとのまつり事なり依て御
裳濯川といふハいつの代よりの名なり
やらん横洲御裳濯川と申なる王

十一代垂仁天皇の皇女大和姫の尊
を御神鏡を戴き国々を巡りたまひ
しが此国に来てハ伊勢の二見の浦より此
河路に付てのぼりたまひしが此所にて御裳のすそ
をすゝぎたまひし此川にてすゝがれたまひ
しよりて御裳濯川とハ申なり
以上
其時田作の翁の有しが神の御鎮座

に成へき所やあるとは尋有しに　波
翁申様ハ三十八万歳の間此山を守護
ある者ありけれ道志る人やさんとてば
川上の限り下津岩根を志きて
年ふるといへり其田作の為には
ば二の真玉の神是也　則露入ぬる
しよりば山をハ神路山とも名付　川をハ
神路川と云て　流も久却共に
世のは天長地久嘉辰令月の頃新
濁らぬは常に澄川の神徳ぬるき水
田をなしハ神に住まらく作なし　結て
実ハ有難や其身ともさそてとまむ
のかひし其所ハ多大かいつくの狂そ
川見ハさいきうるも下しとくば　裳濯

川と名付し事は名分流瀬乃鳥迄り
あきハ神が瀬と宣へと申し黒雨
白や神が瀬とハ神風と社家の言葉
は是ハ常の如く神風や御手洗と申
も神の誓ひ又流川ハ神が瀬とて
神慮ゑて世乃あきハそ御手洗川
猶申あき　然ハ奇人乃言乃葉にも

上歌
山のべのみゐをとりうつり神が世の
御手洗乃しめぢがうちひらけ河瀬となりし続
しも其やまと姫の古へと讃なる
心ありちはやぶる神路の山の村雨
は猶捨てとまくある神の代ぞ久しき
うるほひのあまの押孫の天が下廣
き恵みあまねくも是ハ神徳にあらす

や有かたの神ぞちかひやかに有難の
神の誓ひや伊勢両社の神秘深く
に物語らへ今ぞきく身のほどや和光達
ひの丸支とはこそ神徳王地の恵ミ
さとうらぬあまこそも拝領あり
丈人も天下の神物とかざりけるに
正直をもつて本とせば日月四州

を照さずといふ事なし乃分てハ唯正直の事
へはやもり給ふ経路に二所宗廟の
御心をも之らんと思はゞ正直をもつて
持さいとせよ御経あるに大神地神
の為に皇孫を葦原の中津国
都しきらんと思して三種の神宝を
付けらる枝ありしかば三種の神も

まさしくてやうの見えしにおけば影
をうつしては所をさらぬ御影
鏡のまくもなきにこそまもりしあり
らまくらもゆ一物をつくして天が下を清
めぐる直を授居つりけりは生し
まろその日月の君徳にありから
さればいまだ物をおきをりて内宮の

は神徳をてらさるやその御ことは神代
の昔より今人の世に至る迄神勅
のごとくに垂仁天皇の御宇とかや
下津岩根に宮居して皇太神家
ますますいよいよ栄えの和光ましまし
御ちりの世を守らん為のはからひ
然も同じは心の光やうき女の月

よこの神の示現し給へり　有難
き神道のくもらぬすゑを請て
しる人の心こそ有難き　一川の流まで
くみてしるべきすゑしも宮ゐ都人
君と神とは隔てなきこれ物語申し
（地）そもそも老人は誰なるいはずとそ知る
白ゆふのうらみは代ぞとあらはさる

（地）天津空孫の郭子声鳴も抑揚
玄神の声そとよしての田長と
云へるうかる神鳥の羽よとて御
裳濯川のまことせば神が瀬を打
渡りて跡を波に入まつり給ふ
波に入まつり擬孫まるは裳濯川の
波枕ぐ月を曇らで天てらし御

影さうけて神路山更行雲乃気色迄
ありうるそ難やし君乃代ハつきじと
そ思ふ神乃世やはれ裳濯川乃きよき流り
かぎりなく百王守護乃神明にして
和光善き代々乃数猶幾久しきまつらき
乃きよら代や迄も守りの神息の神
とかくやまし　や玉垣乃やの内外の宮居みや

あちて　月よみの宮居でりまするあり。
いさぎよき渓や清乃宮居　宮あら山宮よ影
くまや　塩干乃石と残せしも　湖水方
便乃影にあらぎそくゞ子振あり山
ゝちれ袖神風や伊勢の浜荻折敷て
旅寝やまらんあら磯辺よく
遠き渚の玉乃数く　光りを天照るそ

神乃岩戸の昔をもへば榊葉乃青和幣
ちはやの袖や裳濯川乃波乃白
みぎて氷乃あとをみぎて玄く撥
くの神遊び鏡乃宮居あら絶乃
塩ときよ沖よりしへて白波のく
又立帰り二見乃浦雲の千代の影
ある神と君こそ久しけれ

次第

元服曽我

うつゝを恨乃あさ衣くく恨を晴さむ
恨を晴さむ 加様に候者ハ曽我乃十郎
祐成にて候 扨も某が親にて候河津乃
世に隠なき人々也 我等兄弟ハ猛かれども一
人の力よも狂よ思ふ甲斐なく
扨る又弟にて候箱王ハ幼少より

箱根の山寺に上らせ給ひつゝ縁の便あれは
猶も彼者とも男になし法体になさすと
遠をたやし者とて箱根の山を下ると思て
一樹の陰にやとる力もおなしき流の契
まして同し清き流れを汲も皆前世の
ゆかりの宿縁ありて深き乳房の海
山の峯にこへて積る恩徳の情をわすれ給ふの

袖ほとたよるをも待遠の命を頼も
計ありけなる露霜の果まてくも見
帰りまきてはいつをもなし急き箱根の寺
かへらせ箱王殿もと男になし　父母
うち立ちの深き形見を忘れはほとゝきそて
その里を立出るや月数ふる雪ふらく
何かるさとに猶山くも岩も分つゝの郭

うつくほのくとうりうち富士を湖の
嶺の雪を時しらずて其百敷を人退れ
我もげに思ひの色を染めぞ見られ
世のうきを忘れ果てぬる命惜しまんく

シテ詞 急程に是ハはや箱根の寺に着て候
ていかに此別当の御坊へ申て其の
我登山のよし御申候へ トモ 畏て候いかに

ヨカシ 此御坊へ案内申候 ヨカシ 誰にて渡候ぞ
シテ 只今兄弟の者登山にて候其由御
申候へ ヨカシ 心得申候 御物申候侍へ其由申
入候兄弟の者登山にて候いかに申候 ワキ詞 何事ぞ
ヨカシ 曾我兄弟の御登山にて候
ワキ詞 何と兄弟の者登山と申か有と申か
ヨカシ はちん ワキ 急いで此方へ御通り候へ

みてあらうと存する。いつもの如く申さう　ツレ　是くは
かやうに申候ものは、あたりにすまゐと申
候まで　ワキ　是でござる。それ此程挨拶唯とて
はやばの行すみは入てぞ　シテ　はんなく
参らしまする下人の縁ありあるへ弟
あるく箱王もとや精元服せはきん為
まゐりて候　ワキ　何と箱王殿を元服さ
させん為に御出と候や　シテ　さらん
ワキ　是は思ひもよらぬ事を御申候。箱
王殿のちるすハ大方ならずとも合候
まく子細之候。思召もよらぬ事あるまじく
候　シテ　何ともかしく之へ、たゞそれは母のかしは
者の母をかゝひゝくやはちろくのかし
給へしたくさんまよ鉄帽子絵りて　ワキ　いや

大方殿御一人みすてかくれなばかくろ
殿の作ぬれつる子細も聞あつて
私が心にいはまひ皆まし給ふ彼を
しもたるは親にては去のやう
事也まるやうにへともはかなう
御こゝろを志へのめくいで言作へ我
らがおやの如き死めざれる八ちもとい存

作へいとも　下九　歎ハ猛勢ちらすか唯
別当乃法義悲みし箱王殿を男よ
おし父乃形のかたさもとき共ようしは
て孫ふずらへば出家のすゝくませさる
まいと　上ゟ　かくへくる死つ申さは是非
ハル下　丸宝残多もはるゝたてう理なりや痛ハ
しやと別当も列座の人もおちよ我

ちよほりまて夢の世になりうらく

くやるをもうひなさけ乃ゆく末に

のちそらことかる杉もまぬかれぬ

と思ひをしのふも涙そけくも孫の

今はもとより富士の裾にあらそ見え

誰かそのなき跡をとはれん

扨々よくこそ立よられ候ハ侍て候

此上ハ力なき事別當ハそれや領

掌申し出すへく箱王殿乃御心中

何とも思召され候はんしはらく此方へ呼出し

君の御中ちかけハ致すへく　かるる殺害

あるまじき事にて候さらは箱王を

此方へ呼出し　心得申候あやまりはいかに申候

箱王殿よ此方へ御出あれと申候へ

ヲクリ
曇らで伊豆の箱王殿兄弟の
住登山ハ今の御よあらん箱王殿を
男に成りやがらむとすゝめたき由
祐つね聞て兄信ハそや領掌やて今
依心にハめでたく思ひまゐらす箱王も
角も御返の所きそひて法へ參られ
まさかつる祐つねの親の敵なる世に隠

なき事なれど聞え兄弟みるくへは
十郎殿乃ち弟に独りは涙の敵を
うちをひ寺まゐりても忘るゝ事は
ようもあらし箱もくもりて給ふる人
扨ハ箱王殿も出家しけれ歩みよう
めでたき祐つね心をとめあそぶ御名利く人
箱王殿生れたる時古河津殿

別当ハ石清水にまゐるへくハ弟子ゝ
してきゝひたまへはまくハ亀もかく
をみ出ハゝひゝるなしと語られし
箱根権現の志やうらん別当なれハ箱根
さかれハ名をも箱根とつけやし
今乃衣服の折返も御弟子乃契約語りけれ
同じをハ出家ともかきけり一寺

されハ鎌倉中にてくるものハ心を
はかりすぐ総のちるものハいくらしし
より俗郷によく慈悲をうらよハ慈悲
乃心中をよはしよれハ仁義を宗として
諸国の影身によく経へと別当手つから
酌をせらるゝ弟子も御弟子や
兄弟の情ハからまよ語らんとしかつきの

箱根のうミ山のたゝへハ關ころみへ
まゝ年く月日をむかへても栄へをまさる
つるぎの甲斐まかせく今ハやまゝまま
陰高き家のゆくえう見む度々寅て
此見を若ざりしの月わらつきくく
時刻も今ぞ移るなり勝てゆらん
花くとく嵐もつるし梅の香ちゞにても

めづまみりけれはさぬそのかつゝる
名残ハはそれあつ雨やぶもぬ頼ある
中きあれし　まこ登山も有縁ゆや
うらはとひらく兄弟ハ　ちやゝ門前よ
出ゆきさ　まはちそうみ別當をやらん月
別しきつらきはいつ急きも盡きを
見届き八伴なひ兄弟うち曾我の里

めでたうまれく　いやよきにこう

冬三　御かよん　おさ弟乃兄を給はれしを

御前申箱王を伴ひ御まみえさせ給へ

タン　此殿乃とく此目出度さけちまのし此はまく

ハコ王　いやよ申給さ下されば　何卒おうぞ

ハコ王　此まく故郷へ御母子對面やおくれ

定て元服はかなふまじきと給べし

唯此路次にて髪をそやして給れ

久　定て是はたむかしきなうて元服

おやく申すは卿今にいきぬ事に

てのびくに定て三郎箱王は路次に

て髪をそやさそやとやんわ有ぞ

トモ　箱王殿乃此殿乃とくしばまく此御ゆく

定る大方夜の兎角行られべしとさかたな

きやうのみやこへ先行か吾妻ちか道へ
きく目かな恥しの宿りのみ御宿りを
御身も申あれりし海　梅ヶ枝
もはや梅はよみがへさ兄弟は宿
あらうと髪をやめへしいうに箱
主殿が見かへ　宮や主将
伊勢の国の其のもとをもつとも

初しても父をうきさがら是から出ても遂
とそて我ら子がひきのこ引とすりぬ
がくそ八子上限の縁よやうこを
あるゝきの私なたく元服まで婚しきれ
兄弟主従をかこくと　髪をと申
て千代迄ひと残計いかへ先そろよ
せきあへぬ涙やに御かん　割落ちへ生死の

道ならぬよしてだに浮世の迷ひにほだし
因果とそれぞれきまつかもみな親子兄
弟の宿縁なり　言ふや人の親の迷
事識の闇よりあらねども子代ならぬ
道よりはそなたとりよ雲井の露ならぬ
数のさやきさ思ふと思へども兄弟を
の思ひのせうよ拝をめでて鳴こうや

離れぬ親の跡よりまつて我を思ふ
の露の雨ごとも濡るともそでならず
かくし晴ん心のやさしの名もやうの内
まむ苔の下　まつるるかさ無の涙
うれ涙らをん息との古まあまる歎
せまも居の跡をも思へたらずて惜
離きいはむかりの物ばかりをかへ国よ

千里をかくる虎ハ一毛ををしんで
咲家の風をふくミてちるもともにやく
秋ひらりや日ちれ弓取ハ其名を末
代家よ打つ一命をうしなふも
是皆めいぼくをおもふゆへを心得ずや
所ハ一代名ハ末代なりや其中ハ電
光てう石の火のあるかなきかの事よ

乃露消るならひハ易きならひや命
我おもふ方横もと思ひもうき命の情く
ねがはくハ我らもせめてちをとぐる道也
むたよりや兄弟主従ちぎりをつくし
敵をもやして猶そのよそへをる
つきせぬ行衛ハ忽たるへしやおもや
春もかく分はちう家の陰よりわ

らちを守り給ふべし　いかにのうさき法師成
よ申さるゝ事みんひしきもちと言れ
てある間追付ゐうもあれかく有
そ、母をさうらへりて何方迄伝せ候ふ
箱根へ△　最早別当にも申ん別当
兄弟の迄伝せおいて　いかにや御当世
それ迄をむかへて△　何別当風是まで

御出と申ゝかけ方へ立のあひしはく
昔く師匠の御ことわりへ御名乗を
佐見迄足行乃為よ給也そ　思ふ
是迄参るゝの人まの縁よあつて箱王
殿式御見るを通僧を申きしと存
しまりてハ　言事あつて箱王とハ名
我まく故郷へ帰りつて母あつて矣

元服ハかたじけなくもましさよしやと之両
路次の程をもやすらはんと申候ほどに
唯今是まで来りて候
されはこそめでたう候さて元服親
をばいかにがし當家に傳はる重代の太刀
伊豆権現のちかひをそへ思ひ出の
給へと箱王殿に給はる急ぎて頂き

御酒宴つくばひとめ申さやうとと
罔らを急ぎまゐらせ酒宴をさそうハ
もしめでたき恃く比の猶付めあふよ
夢らく急ぎ[illegible]桜の花を見る舞
めでたき[illegible]目出度扨されハ一指
御舞之長く候ハちふ[illegible]そ舞み
まるゝかなや烏帽子桜の花ともろし

上ロカ
菊乃名の曾我はむかしを思ひ出て
上地 酌みし代はよろこびあかれ久しく
こゝろ言葉は人の情深く侍よりあはれる
身はおもしろき名を跡ある世まれ
跡の世うつる文書は覚えあしらひて
其名も高き弓のさきそりのちにひろこれ
かへりても富士の高根よりかゝりもろはを

あまたく今の世の事をかねてめぐる
思ひ出し話をよろこびの酒宴の戯れ
こゝろ尽きぬ物かたり酒宴のためにみれ師
弟子ならすきてそのみ結き

第　絃上

八重の塩路を行舟の　唐土ま

いつくなるらん　抑是ハ太政大臣也

なすとハ我事也　扨も我君と申

まで天下ニ隠れなき琵琶の法上手

而て唐土へ入唐の法望ありしまゝに

より此度思召たちみちのくへ

西の月もはや鳴尾にて津の国の
空みちて御下向ある　師サシ　我も旅
いたりゆくも都の空まつあふぎ
み旅立つ道急ぐにも見えさするやすら
もぶられし跡まてや誠く　上音　ますこ
に神の湊川くまくも生ぬ方かも
これ生田の杜くる月ハ猶間ちらく

心の旅の様若道ぞなる思ひ
ものうきかげとて空思ひたちける
ご風ものやしきようふかぬ空
のうきあをまよひく　早　是の
人相よ思ひなきやはの山空乃らに
出来る此所に体ありけれ
由さも候詔あらす　一世イ二ノ人ニ

かゝる塩屋桶のくしきりよそちらう
須磨の杖 つたなき身をも汲
この浦 鋪あようさやむら竹 面
白や浦に入日海にうつろひ汲や
何のうら風塩屋に延虫乃心
まもげを面しろ須磨あり 南を
わかるみちのむきハ雲につきるき

須磨の小嶋 由良の戸わたる舟
や舟ぎほふ 風吹くや
吹上の浦 おぼろなるみよし須磨ならのゆき
海こゝに 鶯鳴の磯や所夜ね
ますみえずかすむひさすかり いつそか
筆にもみえむ行わたれ須
浦乃気色や空や面しろき 哉

この磯やさ屋にはちかゝりあそく沖舟
思ひこきつくるなご楠ごさ物まし今一つ
なりをもおもひくめやそよや陸
奥乃ちく千賀の塩竈のうらハいづくのうらよく
春まれそしつくもとらむ伊勢鳴やあ
こきうら乃ちかそもあれハさひ重ねく
も浪からト田子みろのちかそもあれハいだ

ありまきもむまつわりしぶふ人あら
ぬ所をところえて此浦乃塩く
まむく　塩屋そくらゐますなる
みくく　塩屋乃主乃ゆりて御宮を
かゝる年ならぬ是あるなき塩屋
乃あるしみくく行ろり　ほらん塩
屋乃主みくく　是よそはすハお成さ

臣師長公と申て天下にかくれまし
まさぬ琵琶の御上手なり
入唐乃ためにこの度都を御下
向かふて一夜のお宿を参らせ給へ
〽(シテ)いやさやうの人に御宿ハくだ
とうなれお宿を参らせ候へ 〽(地)荒何なるや。
難波乃りなれと払ふとも参らせ候へ

へき覧ハ是海乃すみかにて候
たゞお宿を参らせ給へ 〽(シテ)一人若哉
久かたから心宿を参らせ候へ 〽されハ
一年旱魃の御時神泉苑にて び
の秘曲をあそばされしかば 〽(シテ)龍神も
めでさせやけむたちまちに清天俄に曇りつゝ
大雨かゝる時節それなりまつくし君も臣も両

風情とやらんや　加様にやさしき此君
に一夜のお宿をまゐらせて　秘曲をも
聴聞申さんは。二人　嬉しさ思ひて
下歌
かの蝉丸は逢坂や　わらやにてびわをひき
今この君は須磨の浦の塩屋露もたま
らぬ軒の板間あひをささみきさんに逢ぞ嬉
しかりける　上歌　里あれはてし須磨の家居

ありひとそて行るすまつの柱や竹あ
め垣はひまへかく風もたまらしてえ
しや海は程遠きに波音ちかく
ものゝ聞えきそいつれまた夢も覚
ひへきよしくそれもなひそとばちまね
まくみ撥音や日頃も聴聞申へ　我も
聴聞申さん　ロ　めでたき夜も深る

琵琶琵琶を遊ばされんへ　モロ上セん　須磨の春
の雲かとよ源氏流さるゝよ移され給ひし袖
めて音のあらちひゞきさもとよらへ
ともまだ塩志まぬ旅衣なく汁なる涙
の露れむ玉の緒ごとをひきすさむらひ
ほひくおく袖よまりかゝれば思ふなる
よる風や吹らん　それは浦波のごと

うちかへす琶のとるればくゞ思ひはひゞくひゞの
折からなれやまかきめればからやの竹の枝
ひさしめざましは類のよさめや管絃の
ちりちるらむ　如何さまくはひぞとは遊
ちり落ちれくはぞさんは村雨の降らん
類よ梅遊ちり落ちれくは　まさに村雨
の降はさやいかふうそ皆にぞ出しもんへ

ワキ それハ何の為ふてやらん シテ 答ふてく
板屋をかきわつて静ふ独閑やらん
と 祖父とうたれゆるたふ ワキ 答知
出し シテ さつとかきい 垣りまれなのぽちぬ
くとよういつて耳をそへて出居ふる
地 いうに主かはとゆるる板屋の上を行
しよ答ふしぬきて背そ シテ さんけ只しし

遊きわ琵琶の此調子ハ黄鐘板やを
たく雨の音ハ盤渉ふして裡よ答ふし
板やとかきうくし今社一調子よゆらぐ此
地 へされハそ始よりさく人の子ら思ひ
しよ心よくちやひれ琵をたいつてらむ
うそうへき 雨ゆゑは乃ほとう岩て
さてなのひきやきん琵琶と琵琶の思ふ

をしらぬ疑をつけ　思ひよら波もし
程そ経乃おもくれひてちゑあるまて
おもしろひ事をきゝ給へ　うれし
あちもちを立よらへて　ちからころもつま
をとゞめずひまうつきにうちうる感
涙をもこぼしきえつも折ゝ計なりや
ひいきうしく面白や　ゆるき折を

面うくて皆れもおくしひれ奥深
を極つくし国をもうちひしておもひ
しまう事まさしきやまれぬあとに
うき堪能の事まつ前栓
唐をも申すに及ばず　塩屋を
出家へはこれをもきこそひとしれ心
さ川のたし　まつかれちくやさてんおく

風ふかうら春の色　梅かゝる枝に鶯は
華をこそ人の風にはいかで ふきそむ花をやはゝる
鶯ぞやどるさとにありてちよを志つゝもそひ
ふかむまる聲、なすよ嫁入の出立ん
何嫁入の御出立とや、何とてやく
絶やさぬそと　祖父と祖母は
むしろより、　鍵智にてもちても

此袖を見るまでやく横雲のぼるはまふ
かゝる浦の名の山して御出立候へ
何まさらめ給ふ花ふる山なれば海は淵
して重て君やなりて名をもあるは
給ふや　今ゆく行ものとてまたとさ
我ぎみ志ふめして村上天皇
契をこめの女御ちよ婦かあり　ち　そのぐの入唐

やくめでたき天が下をさまれる代なれや治
ねうごゑ乃音の気色浮き思ひ
いそよ人〳〵しばらく出まし給ふよろこび給ふ
く　抑是は延喜聖代の御譲
村上の天皇とはわれなるぞその
聖代乃御宇とよむろちうまま
三面琵琶を渡らするぎんし

為う青山志て丸見ちうず去程に
ハ龍宮へかへらしそて召あし
えのきをさまんくなる海よりま
むかひづる下界の龍神臨り
きけ志て丸持し手にほうまつる　早笛　志て
丸うかとりらしのやうく八大竜女
をとりつゝく御殿ひろげてほうまつ給へハ

がうなり給ひきやうし八大龍王も
絃管乃役をあらひハ般の鼓をうつ
てんがりけるひき琵琶のまことおもしろ
がくやうてんに村上の天皇をしが
あまりふ面白この曲まで秘曲う那
コ上テ
舞 大コ 末上
忘くはいる珠や此ちらんくはんれ
乱れぬる風よ豪し八大竜女よひ

き給へいかにもなるよむらさきう
ちば馬上にて琵琶をたてまつりへて馬上に
琵琶をさゝけて須广乃海濤を
かう羅き

花月

次第 風にまかする浮雲の〳〵 いづく定めん

是は筑紫彦山の麓に住居する者にて候我俗にて候ひし時子を一人もちて候ひしを七歳と申し春の比行方なく失ひて候程に是を出離の縁と思ひかやうの姿と

ゆく〻諸國て修行せんは　まきね
さ花乃身とぞなれども憐むつさ親
られしおやの為あはれハ我かまへし心ぞ
ち山る子まろ千里で行も遠からに
野ずよ外山よ高き身を是ぞ誠乃
まみのあるく　思ひ給り見ぞ
もや花乃都よ登てはじ出家なる

清水よ参り花をも詠め申さばやと存候
定て今日ハ清水へ御参りあるへきにてある
まうしをば花中似人よみをと作つて
シテ詞
抑是ハ花月と申者なりある人我名を
尋ねしに答ていはく月ハ常住にして
云ふに及ばず扨くハ乃字ハとゝへばなる
花夏ハ瓜秋ハ菓冬ハ火因果乃果をハ

まなまなく上一人たよ下万民
迄恩をうけその依るべき方もなき
て天下に隠もなき御事也
何とて今は遁世して さては
と遁世雲居寺に住して心さり
ら礼も塵の友遁世と申たりつ
ちらしまりたるを さらばいつまのを

承寺を颯て御遊行山へ出しけり
あら面白の世遁を絶ぬる所ぞと
るらせ給ふひかりまのやらお
ゑ方まゐらせしだらくさてしも
みな浮しまを あら珍しや参るらう
御でうしきよ 宮尊うきれを
哉作よ某射くおもしける

ヲカシ
△鶯にハ柳のうつり作人▽ シテへ鶯のまろほうきた
雛とほころびて大長刀をもち候に者を
花月が身は敵のなきれをたちかへる
其弓は的射んとすよう籠花狼藉
小鳥でも射ぬべきさんの為そ 力 し異
國書楊由ハ百歩にて柳の葉をさして百に
百矢をいるにもさしなれば花の精れ

傳 大ハ二欠ナハ
あら面白や
和 そのとハ柳も

鶯を射るハおしきことと思ふ心ハなを楊由よ
をしみてなまし あら面白や それを
柳見ハ桜をかりし傳へまきしハ鶯が
も楊由が弟ハ花月に見つけて
其弓に矢をはげてあようをかり打たんと
鶯が楊にとまりたるをあはた
ともしめつく大口見てをは矢を

夜乃袖をもかへしつゝ花の木陰に旅ねする
人寐てよりひきこゝろ射やし思念
佛のちかひもまさに数殺生戒をも破ります
言語道断面白き事を承り候ものかな
人の仰候ごとく当寺の縁起を具に
作者て此縁起を皆一節御
謡へ候はゞ承ほしう候

やさしき事

謂て此寺を申候ひてすなはちされは
にや大慈大悲乃春乃花十悪乃里に
かうばしく三十三身乃秋の月五濁の
水に影清し　抑此寺は坂乃上の田村
丸大同二年乃春乃比草創有し此方
音羽山嶺のこなたの松まてに
なるも清水流れを汲

処さらにある時は瀧の水五色にみえて
落来れハぞらにその中の山に入其水上
を尋ねゆきしにきんされの岩乃洞
乃流れに埋れ名を書柳若朽木有
ぞ其木より光さし異香四方に薫を
まし佛ハ躰に揚柳観音乃
御法よ袖にかくまし南をかけ聖人

手ごとに合掌してたてまつりしに今と
申けるは朽木乃柳なりけり桜乃
あらぬ若木の清白なる花咲きて
よろ手手乃揺るひよ桁ぶる木にも花咲く
やさ今乃世まらくをし申あり
罕詞
當所不思議
やくま成花乃をうくしなかつ葉乃使よ
てたちしにまつ〳〵いうたいかなかなあつさ

ちやと思ふばかりなり花月と申すといふなれば
シテ 何事にて候ぞ　ワキ 御身は何国の人にて
わたり候ぞ　シテ 是は筑紫[illegible]者にて候
ワキ 俗体なか様に諸国を御めぐり候ぞ
シテ 我七つのとし彦山にのぼり候ひしが天狗
にとられてかやうに諸国を見て候
ワキ 扨は嬉しや家を出でし是こそ父の左衛門
家次よ見忘れてあるか　ヲカシ △ 扨かく御
僧は何となされて候ぞ　ワキ さ候ハ此乃
花月は某が俗にてまうけし子にて候
俗か様に申候　ヲカシ 筋なうて家作
ちやくと出て御のきいつもいふに花月が出
いつもの様にはちをはらうて
皆人に見せを出せ ▽ シテ 扨も一[illegible]筑紫[illegible]

山よのいろせ川乃峯天狗よ　とられて
ゆきゝ山をも見ゞ思ひやるは狭うるしきを
都ら猿て御山をもだかやむかしを悲
志きまどゞ汎くはかき乃山深き里に
宮四国王寺讃岐なる松山阿白雲の
ろ嶺がらく伯耆の大ちいき依さうさい
まつがらん丹後丹波乃境なる鬼一
城と国ち大天狗よりもたけうそて
京のこゝさい山と掛家もつれていろ山
愛太郎坊ひら乃峯の次郎坊がゝる
きい比叡乃大嶽よぶさく心のまゝる社
肥れ攫りのなつれまゝし日光さうそて
乃葛城そや屋まもみをなつめゝみつろう
こまや高尾愛山上大峯釈迦乃嶽

富士乃高根尓あ可り煙雲尓起所
時しも有かだ折尓あさらで心尽くる
あれこれさ乃たりきうたさと尓
てハらひまゆくいかき山がく嶺を
里くもむかりくてあ乃僧尓ごひ
斗もうれしきよう此きるがさと
捨く佗乃つぎかる御僧尓つき
急ぎうとく仏道修業しあらせらく佛
道乃修行尓出るそうたしかりけれ
く

現杜鵑

奇

是ハ白河院より仕へ給ひし下也
杉も此ほと帝御悩よてまします
ある人奏して云東三條の林頭よ
黒雲一むらとひきたりて御殿の
うへにおほふ是をみる度に御悩よてまします
頼政に仰て音も去例あり陰眞

守源義家君を守護し奉れよ
づかる霊代にやを付奉るべきと
弓の絃を二三度ならしければ忽御悩
をこたり給ひぬ然ばその吉例
をもつて源頼政を召さるべきの宣
旨ありし仍て唯今は上しとやさや
せ為れば頼政此ほど帝以外

御悩のおこる時分になれば去る方東三
條乃森頭より黒雲一村飛来り
御殿の上に覆ふとみゆれば必御悩お
こりまさるは悪き政より化生のものなれ
ば仕まつるの御事なるべく　宣旨
依て頼政は武士の召使なれば朝
敵を亡さむが為成ば世の目にも見

ぬ代まれこの射よとの宣旨ぞ時
寛の作 寛是ハさかんなる
をも代々きく紀伊国なる山蜘
蛛多く集りし是ぞ敵のためし
とかや 今ハ行更 治りて
萬代乃例まそひく葉末ぞ逢
乃やしなおさまりて国ゆたかなる

御代とてや民をもまもる時なれや
君こそ君ハ家くれバさるなれ右
うちやく ことに頼政一張乃弓射
て天下をおさめたる謂ある物なり
抑々天神七代地神五代
の代々をもなびかしぬれしを是にあ
たり天下を治めし始とかや

風しやまつを傳えて其名をとく
その上にあくぎやくハ深明王ハぢや
うからこの矢をもて悪魔をたいらけ
まつりざ神功皇后新羅をせめ給ふ
たまひしそのむかし御弓の筈に
て岩屋うげ異国乃我ハ日本のま
もりと書し文字の姿今の世に残る

こそて動きなき国乃御ちなれ　爰に
私宅にこもり用ゐきびしく毒ふつくは
扨も頼政ハ思ひよらず君の宣旨を蒙
り御アやめの狩衣に重藤の弓
作く山鳥の尾をもつてはいだる矢
二筋取そへもたる郎等にハ　遠江
国乃住人猪早太に　母衣のかざ切

ならひなき矢取を唯一人召し
具したり　かゝる所に夜も更けて
俄に吹来る雨の音すさまじき時節
と成りけり　不思議や又例の
影乃ごとくなるもの見えつるが
東三條の林よりも黒雲一むら
立来つて御殿の上にぞかゝりける

頼政心に祈念して南無や
八幡大菩薩化生のものを射させて
給へと眼をひらき能く見れば頭は猿
尾はくちなは手足は虎のごとくなる
が鳴聲鵺に似たりまことにかゝる
矢取てよつぴきしばし化生の
真中をひやうと射通されあさり

まづひつ敵乃上にぞりともめくかつ
ありしをたまらず鎧さかちり腰よ落ちきるを
樣の早苗つとめつごをはとしきれは
既ちうひゆくがずぜすいつめ一刀二刀三刀に
あの刀にさしてめされたり弓矢の家に
斬後うつさはひずめぬ人ぞなか
りけり

右之本者觀世太夫織部
以章句真本今令新改
版者也
寛政十一己未歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二條通御幸町西入町
山本長兵衛